

無理な助産が乳用初産牛へ与える影響

畜産研究所

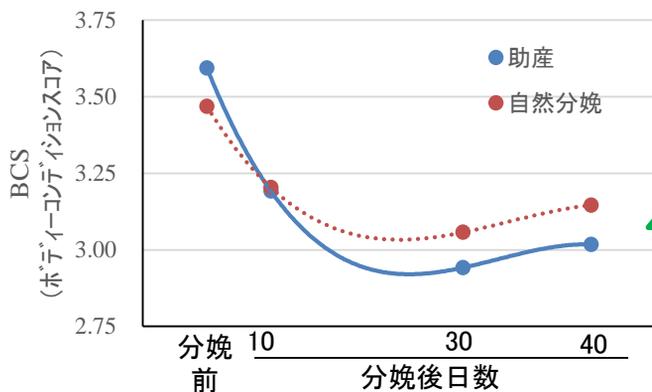
本県の乳用牛は、生乳を生産できる平均年数が他県に比べて短く、その対策が求められています。アンケートと現地調査の結果、助産（けん引介助）を常に実施している農場ほど、乳用初産牛の廃用※¹率が高い傾向にありました。そこで、無理な助産※²が乳用初産牛にどのような影響を与えているか試験したので、その結果を紹介します。

※¹ 廃用：生産性が低いなどの理由により人為的に淘汰すること

※² 無理な助産：まだ産道が十分に開ききっていない状態でのけん引介助

無理な助産による影響

体脂肪の蓄積を示す数値の推移



無理な助産を行うことにより、分娩後のボディーコンディションスコアが大きく低下し、その後の回復も遅いことが分かりました。

これは、分娩による損傷のため、エサが十分に食べられず、エネルギー不足によって急激にやせることを示します。

分娩後の初回排卵日数と受胎率

試験区	初回排卵日数	受胎率*
助産	35.6日	44.4%
自然分娩	23.7日	77.8%

(* 人工授精3回目までの受胎率)

無理な助産を行うことにより、分娩後の初回排卵が遅くなりました。このことは、次の妊娠までの期間が長くなることを示します。

また、人工授精による受胎率が低下しました。このことは、次の妊娠が困難になることを示します。

その他にも

- ✓ 後産が排出されるまでの時間が大きくばらつき、遅くなる傾向がある
- ✓ 外子宮口が傷つき、治るまでに時間がかかる
- ✓ エネルギー不足や体脂肪動員の指標値が高く推移する
- ✓ 肝臓や心臓への負担を示す指標値が上昇するなど、いわゆる「産後の肥立ち」が悪くなるようになりました。

成果の活用

畜産研究所ではこの結果をリーフレットにまとめ、県内の全酪農家へ配付し、無理な助産は避け、なるべく自然分娩で産ませるよう啓発しました。

お問い合わせ

畜産研究所 酪農飼料環境部 (Tel 0175-64-2791)